



館長だより

山形県産業科学館

令和 7 年 1 0 月 5 日(日)

発行 館長 加 藤 智 一

火中の栗を拾う

2025. 10. 5 朝日新聞 天声人語には、この度自民党の総裁になられた、高市早苗氏が多用されていた、「火中の栗を拾う」という言葉について、深掘りされていました。私も大変気になっていたもので、さらに深掘りさせていただきました。天声人語の担当者様には申し訳ありません、かなり文体が似てしまうと思いますがご容赦ください。

「火中の栗を拾う」ということわざは、ビジネスや日常生活におけるリスクを伴う行動の比喻としてよく使われています。しかし、その本来の意味や由来を調べてみると、単なる自己犠牲や勇気の象徴という解釈とは少々異なる深い含意があるようです。

この表現の起源は 17 世紀のフランスの詩人ラ・フォンテーヌによる寓話『猿と猫 (Le singe et le chat)』にあります。中国の故事ではありません(火中の栗を拾うという行為自体は、中国古典にも似たような忠義や勇気を象徴する行動として描かれることはありますが、「火中の栗」という表現そのものは中国の文献には登場しないそうです)。物語のあらすじはこうです。猿が猫に対して、火の中で焼かれている栗を手取るようそそのかします。猫は熱い栗を拾うために手を火に入れ、大やけどを負いながら栗を拾いますが、最終的にその栗はすべて猿に奪われてしまうのです。この寓話は、他人にそそのかされてリスクを冒す行為が愚かであるという戒めを含んでいます。フランス語での表現「tirer les marrons du feu」や英語の「pull a person's chestnuts out of the fire」が示すのは、基本的に「他者の利益のために自ら危険を背負う愚かさ」で

あり、自己犠牲を称賛するものではありません。

一方で、日本にこの表現が伝わる過程でニュアンスに変化が生じました。日本語で「火中の栗を拾う」は、古くは明治期の翻訳教科書や故事成語辞典を通じて紹介されましたが、徐々に「自己犠牲の美德」や「困難を承知で挑戦する勇気」として肯定的に捉えられることが多くなりました。これは、日本文化における集団主義や忠義、義理の精神が背景にあると考えられます。日本では他者や共同体のために取って危険に立ち向かう行為が、むしろ称賛される傾向にあるようです。

つまり現代日本で、このことわざは二つの文脈で用いられます。一つ目は本来の意味に近い「他人の利益のためにリスクを冒す行為」、二つ目は「危険や困難を承知のうえで挑戦する積極的な行為」です。たとえば、新総裁の高市氏のように、身を削って党の立て直しに尽力するという決意の表れとして使ったり、会社の困難なプロジェクトに自ら手を挙げることや、赤字必至の取引を引き受ける際に「火中の栗を拾う」という表現が使われることがあります。この二つ目の用法は、本来の戒めのニュアンスから逸脱していますが、現代日本の文化的価値観に合わせた自然な解釈であるともいえますね。

以上のように、「火中の栗を拾う」という表現は、もともとの戒めのニュアンスと、日本文化における肯定的再解釈という二面性を持っています。日本でこのことわざを使う際には、考えて使わないと、誤解のもとになりかねませんね。

「身を捨ててこそ浮かぶ瀬もあれ」なんてことわざもありますが!!

